

2 遺構間接合する須恵器について

合戦原遺跡の横穴墓出土遺物には「複数の遺構から出土した破片が接合できた遺物（以下、遺構間接合遺物という）」が多く含まれていた。土器類の中で遺構間接合が確認されたのは須恵器のみであり、図示できたものだけで55個体ある。その器種内訳は、甕29個体、長頸壺8個体、フラスコ形瓶4個体、広口長頸壺3個体、大型長頸壺2個体、短頸壺2個体、平瓶2個体、壇1個体、壺1個体、高台壺1個体、高台碗1個体、盤1個体である。それらの破片は37基の横穴墓で出土した。

このような須恵器破片の遺構間接合の事例は、九州や山陰地方の西日本地域の古墳・横穴墓で報告されているところであり、複数の横穴墓にまたがる須恵器の接合関係は、横穴墓で実施された葬送儀礼に関連する「須恵器の破碎散布行為」によるものと考えられている（註1）。特に横穴墓での須恵器大甕を使用した儀礼は、北部九州の初現期横穴墓で始まり、その後、出雲地域に定着した祭祀儀礼であり、東国各地に拡散した出雲系横穴墓の造営とともに伝わった儀礼のひとつとみられている（池上2015）。

今回の合戦原遺跡の発掘調査では「横穴墓分布域の全範囲」が記録保存の対象となったため、全ての横穴墓の精査を実施することができた。横穴墓における遺構間接合遺物の様相を探る上で、極めて良好な例と言える。そこで、本項では、合戦原遺跡における遺構間接合遺物、そして須恵器の破碎散布行為の様相を明らかにしていきたい。

（1）遺構間接合遺物の整理方法

【整理作業の経過】

まず、合戦原遺跡における遺構間接合遺物の整理経過について触れておく。第1分冊第3章第1節4(2)でもその経過を示したが、今回の遺構間接合遺物の確認作業は、遺物が出土した横穴墓50基を対象に実施している。対象とした遺物の種別は土師器・須恵器・玉製品・石製品・土製品である。金属製品については保存処理の都合上、対象には含めていない。まずST1～54それぞれの遺構内出土遺物の接合作業を実施し、その後、ST1とST2の遺物の接合関係の確認、次にST1とST3の確認、といった流れで、全ての横穴墓の出土遺物を総当たりで確認する方法をとった。結果として1,225通りの組み合わせ作業を行うこととなったが、土師器・玉製品・石製品・土製品については遺構間接合遺物が1点もなく、須恵器のみが遺構間で接合するという事実を確認することができた。遺構間接合遺物を確認した際は、「どの部位の破片」が「どの遺構のものと接合」したかを記録し、併せて遺構間で接合する破片の点数把握も行った。そして、その状況を容易に把握できるよう「3Dモデル編集のための回転撮影システム(CUBIC)」を利用し、遺構間接合遺物の6面展開図（模式図）を作成。その模式図に接合関係の情報を記載することとした。本書で掲載した「遺構間接合遺物展開模式図」がこれにあたる。

【遺構間で接合する要因の整理】

先にも示したが、今回遺構間接合遺物として図示できた須恵器は55個体ある。この55個体を取り扱うにあたり、それらが各々どのようにして別々の遺構に分離されたのかを整理する必要がある。須恵器の破碎散布行為の事例が他所でも報告されていることを踏まえれば、合戦原遺跡の事例も同様の行為によるものであることはほぼ間違いないだろうが、55個体の全てが破碎散布によるものかどうかの検証は行わなければならない。遺物が遺構間で接合する要因としては「自然流入」「人為的要因」の二つが想定される。前者は雨水等による流れ込みや動物等による移動、後者は①当時の人間による意図的な散布、②追葬に伴う移動、③後世

の盗掘に伴う移動、④近現代の土木工事等による攪乱、⑤調査者の遺物整理時の誤操作などが考えられる。合戦原遺跡での事例はどれに該当するだろうか。

-人為的要因の想定-

可能性の小さいものから順に検証していく。

⑤調査者の遺物整理時の誤操作：今回の整理作業にあたっては、遺物量が多いことを踏まえ、原則として、遺構ごとに収納袋から取り出し、別遺構の遺物が混同しないような措置（遺物注記後の作業、作業テーブルの分離など）も行った上で作業を実施している。また一遺構の接合作業が完了した後は、一度全ての遺物を片づけた上で、新たな遺構の遺物を広げるといった作業方法をとっている。そもそも遺物の遺構間接合の事実が判明したのは遺構毎の接合がある程度進捗した段階だった。したがって、その時点においての遺物混同はなかったと断言できる。さらにその前に実施した遺物洗浄においても、袋ごとに洗浄・乾燥・収納を行っているので、その段階での混同もないと考えている。加えて、遺構間接合の事実に気づいた後の作業は、遺物を混同しないよう注意を払って作業を進めている。よって、⑤の人的要因は該当しない。

④近現代の土木工事等による攪乱：今回の現地調査では、原則として、近現代の攪乱と判断される痕跡は先に掘り上げ、遺物を回収する方針で作業を進めている。また、横穴墓から出土した遺物については、その都度、出土位置・層位の記録を徹底した上で取り上げることとし、必要に応じトータルステーションによる位置記録も実施している。したがって、現地調査の段階で攪乱出土遺物と横穴墓出土遺物の分離は確実に行っていたと考えている。よって、④に該当する可能性は極めて低い。

②追葬に伴う移動＋③後世の盗掘に伴う移動：これらの行為の結果として「同一遺構内で遺物が移動」することは十分想定できそうである。しかし、合戦原遺跡では55個体にものぼる遺構間接合例が確認されており、追葬・盗掘時に「割れた須恵器の一破片のみが別遺構に偶然移動する」といった現象が頻発するという想定は困難と考える。仮に追葬・盗掘時に偶然遺物が移動したのであれば、遺構外出土遺物同士の接合は一定量発生するはずであるが、合戦原遺跡ではそうしたケースは極めて稀である。よって、②・③に該当するケースも極めて少ないと判断される。

①当時の人間による意図的な散布：上記②～⑤の検証の結果を踏まえ、消去法という形にはなるが、①が遺構間接合のプロセスとして最も解釈しやすい要因と判断される。今回確認した55例の中には、離れた遺構間で接合するものが多く含まれる。上記④・⑤によるものは論外として、こうした事実を②・③のみで解釈・説明することは困難と言える。また、須恵器のみで遺構間接合遺物が確認されていることも見逃せない事実である。上記②～⑤が主たる要因であれば、土師器など別の遺物にも遺構間接合があつてもよいはずである。つまり、「須恵器のみが遺構間接合する」という事実を「単なる偶然」として捉えるには無理があると考える。よって、これらの事実を無理なく説明できる人為的要因は、①の「当時の人間による意図的な散布」が最も自然と判断される。

-自然流入の想定-

遺物の自然流入として、雨水等による流れ込みや動物等による移動が想定される。特に、この横穴墓群は斜面上に立地するため、雨水等の流水によって斜面の上にあった遺物が下に移動するのはごく自然な現象である。しかし、「須恵器のみが遺構間接合する」という事実を踏まえれば、主たる要因とは想定し難い。したがって、自然流入が関与したとしても、その度合いは低いと判断する。

-まとめ-

以上のとおり、本横穴墓群における遺物の移動は、「人為的散布（上記①）」を主因とし、それに「自然流入」が部分的に関与して生じた事象と捉えるのが最も妥当という考えに至った。本横穴墓群における遺構間接合遺物は、この考えに基づき「自然流入」「意図的散布」に仕分ける。

(2) 合戦原遺跡の遺構間接合遺物の整理

遺構間接合遺物は、54基中37基の横穴墓で確認した。具体的にはST2~7、9~14、16~18、20~22、25、27、30~32、34~36、38、44、46~53・54の37基である。全体の約7割の横穴墓に遺構間接合遺物が存在する計算となる。遺構間接合遺物の器種と接合遺構をまとめたものが第66表になる。以下、「各遺構内での遺物出土状況・接合遺構の位置関係」そして「遺物の個体情報」を確認しながら、合戦原遺跡の遺構間接合遺物の詳細を整理してみたい。

【遺物の出土状況、接合遺構の位置関係の整理】

ここでは遺構間接合遺物の出土状況、接合遺構の関係から読み取れる情報を整理する。

-出土状況-

遺構間接合遺物の破片は、玄室内と墓前域(墓前域由来とみられる検出面出土のものを含む)の2区域で出土している。図示した遺構間接合遺物の総破片数は3,055点を数えるが、このうち玄室出土の破片は9横穴(ST2・3・7・11・12・22・27・49・50)で40点出土しているのみである。つまり、大半の遺物が墓前域で出土したことになる。また、遺構間で接合する遺物の大半は、破片の状態で面的に出土している状況であった(第1・2分冊事実記載参照)。したがって、祭祀等で破碎された遺物の可能性が高い。なお、玄室で出土した40点の破片については、標高的に玄室が高く墓前域が低いという横穴墓の構造を踏まえた場合、墓前域から自然流入したものではなく、墓前域で破碎された破片が意図的に玄室内に散布されたとみるのが自然と考える。

以上から、遺構間で接合する須恵器は、すべて墓前域での祭祀に由来する遺物と捉えることができる。

-接合遺構数-

遺構間接合遺物55個体について、いくつの遺構の破片が接合したかを調べてみると、2遺構間接合が39例、3遺構間接合が8例、4遺構間接合が7例、6遺構間接合が1例となる。2遺構間の接合事例が半数以上を占める。

これらのうち、3・4・6遺構間の接合事例については、数十メートル離れた遺構間で接合するケースが多く認められることから人為的な散布とみてよいと考える。なお、最も距離が離れた事例を挙げるならば、ST27出土の須恵器甕(E-161)は直線距離で約60m離れたST2出土破片と接合関係にある。

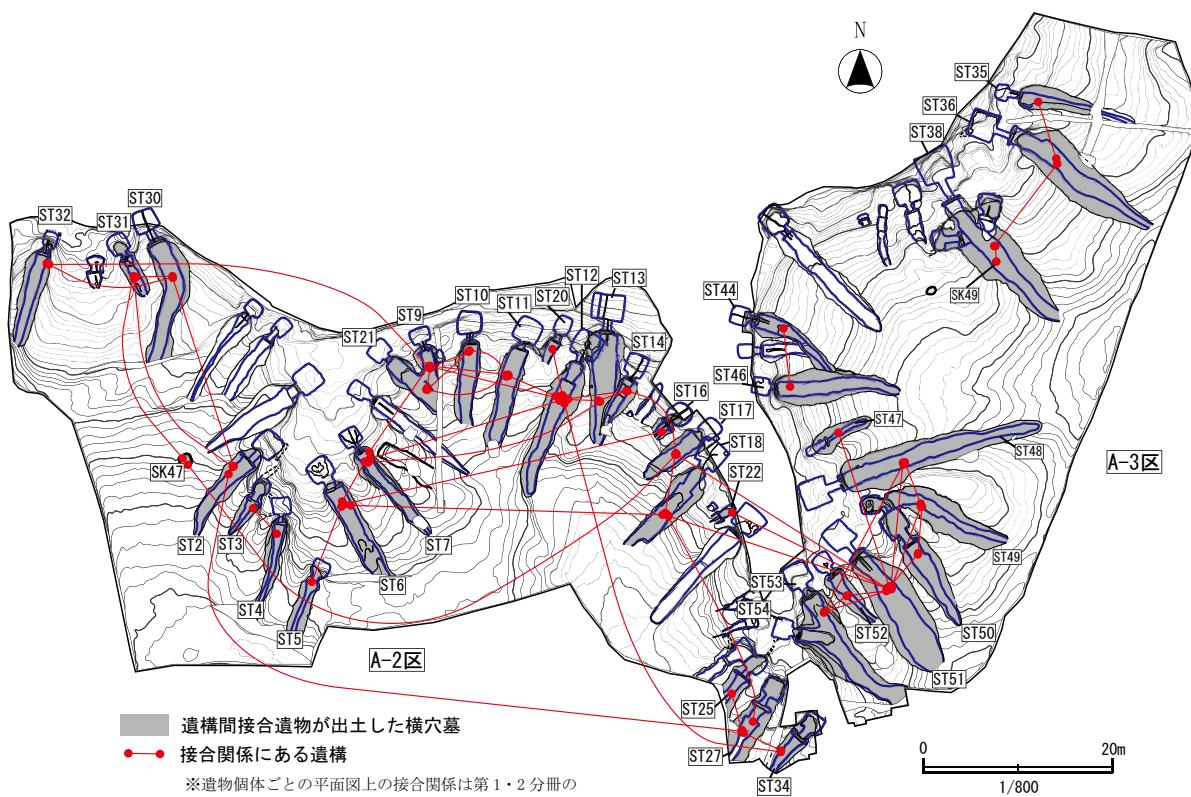
次に2遺構間接合の39事例について詳しく見てみると、隣接遺構間の接合事例27例、離れた遺構間の接合事例12例に分けられる。後者は人為的散布と判断されるが、前者の隣接遺構間の接合27例については、人為的なものと言えるだろうか。そこで、横穴墓間の遺物接合関係を第478図に示してみた。隣接する遺構間で接合関係にある遺構の多くは、平面上でみてみると数メートルしか離れていない。自然流入を想定できそうである。特にA-2区西端に位置するST30とST31のような「墓前域の下方に別の横穴墓がある位置関係」の場合や、A-2区中央のST9とST21のような「墓前域が重複」しているようなケースは、雨水等による自然流入の可能性は十分想定できる。一方、ST6とST7のような並列した位置関係の場合はどうであろうか。ST6墓前域の遺物がST7墓前域に移動することを想定した場合、一つ問題が生じる。それは墓前域の起伏に富む形状である。合戦原遺跡横穴墓の墓前域は平面形が細長く断面形が窪んだ形、つまり溝状の形状を呈している。この溝状に窪んだ底地にある遺物が隣り合う横穴に移動するためには、墓前域の壁を飛び越える必要がある。この横の移動は雨水等による自然流入では不可能である。そのようなケースでは、隣り合う横穴墓間での接合であっても人為的散布と判断する方が適当であろう。合戦原遺跡の横穴墓群全体を俯瞰してみると横穴墓の配置は横に並列する形が基本となっている。よって当遺跡では、2遺構間接合の多くは、自然流入によるものではないと想定してよいと考える。

第66表 合戦原遺跡横穴墓地区出土 遺構間接合遺物一覧

No	須恵器種	接合遺構数	接合遺構	図版番号	No	須恵器種	接合遺構数	接合遺構	図版番号	No	須恵器種	接合遺構数	接合遺構	図版番号
1	長頸壺 [E-42]	2	ST3+ST4	34-3	19	甕 [E-140]	4	ST12+ST7+ ST11+ST20	103-1	37	甕 [E-167]	2	ST31+ST30	225-1
2	甕 [E-129]	2	ST3+ST4	34-4	20	甕 [E-143]	2	ST12+ST13	104-1	38	甕 [E-168]	2	ST32+ST30	233-1
3	甕 [E-130]	4	ST6+ST5+ST16+ A区検出面(ST4+5付近)	52-1	21	甕 [E-144]	2	ST12+ST13	104-2	39	甕 [E-172]	3	ST34+ST27+ A区検出面(ST3付近)	241-1
4	甕 [E-131]	3	ST6+ST7+ A区検出面(ST3付近)	53-1	22	甕 [E-147]	2	ST13+ST12	115-5	40	長頸壺 [E-83]	2	ST36+ST35	255-3
5	長頸壺 [E-44]	2	ST7+ST6	63-1	23	平瓶 [E-53]	2	ST13+ST14	115-7	41	甕 [E-176+177]	2	ST38+ST36	287-1
6	短頸壺 [E-43]	2	ST7+ST6	64-1	24	プラスコ形瓶 [E-52]	2	ST13+ST14	116-2	42	甕 [E-175]	2	ST38+ST36	288-1
7	大型長頸壺 [E-134]	3	ST7+ST12+ST13	63-2	25	プラスコ形瓶 [E-54]	2	ST13+ST14	116-1	43	甕 [E-180]	2	ST38+SK49	289-1
8	甕 [E-132]	2	ST7+ST13	62-1	26	甕 [E-157]	2	ST17+ST18	136-1	44	長頸壺 [E-87]	2	ST44+ST46	317-2
9	高台壺 [E-45]	2	ST9+ST21	75-3	27	甕 [E-158]	3	ST17+ST18+ SK47	135-6	45	甕 [E-179]	3	ST49+ST48+ST50	343-2
10	甕 [E-46]	2	ST9+ST32	75-6	28	甕 [E-151]	2	ST17+ST14	138-2	46	甕 [E-184]	2	ST50+ST49	362-4
11	甕 [E-135]	4	ST9+ST7+ST11+ST12	76-1	29	長頸壺 [E-55]	2	ST18+ST6	150-4	47	甕 [E-185]	2	ST50+ST49	363-1
12	プラスコ形瓶 [E-47]	2	ST10+ST11	84-5	30	盤 [E-41]	2	ST20+ST12	165-5	48	長頸壺 [E-102]	3	ST51+ST52+ST53+54	381-3
13	プラスコ形瓶 [E-48]	3	ST10+ST9+ST21	84-6	31	甕 [E-161]	4	ST27+ST2+ ST18+ST25	192-1	49	長頸壺 [E-104]	2	ST51+ST50	381-4
14	壺 [E-136]	2	ST10+ST9	84-7	32	甕 [E-165]	2	ST30+ST2	211-1	50	広口長頸壺 [E-103]	2	ST51+ST21	382-2
15	大型長頸壺 [E-137]	2	ST10+ST9	85-1	33	甕 [E-166]	4	ST31+ST2+ ST30+SK47	223-2	51	甕 [E-186]	6	ST51+ST17+ST18 ST47+ST48+ST49	378-1
16	短頸壺 [E-50]	2	ST12+ST21	99-5	34	高台塊 [E-75]	2	ST31+ST30	224-8	52	広口長頸壺 [E-117]	2	ST53+54+ST51	411-4
17	広口長頸壺 [E-51]	2	ST12+ST34	99-8	35	長頸壺 [E-73]	2	ST31+ST30	226-1	53	甕 [E-181]	2	ST53+54+ST49	408-2
18	甕 [E-139]	3	ST12+ST11+ST14	102-2	36	平瓶 [E-76]	2	ST31+ST30	225-2	54	甕 [E-197]	4	ST53+54+ST49+ ST51+ST52	409-1
※須恵器種種類の下段〔 〕内番号は、遺物の登録番号を示す。										55	甕 [E-198]	4	ST53+54+ST49+ ST51+ST52	410-1
※図版番号:第1~分冊の実測図掲載番号を示す。														

※須恵器種欄の下段〔 〕内番号は、遺物の登録番号を示す。
※図版番号:第1・2分冊の実測図掲載番号を示す。

※図版番号:第1・2分冊の実測図掲載番号を示す。



第478図 今戸原遺跡横穴墓地区における須車器の遺構間接合関係

上記の想定に基づき、合戦原遺跡横穴墓の遺構間接合遺物を仕分けた結果は次のとおりである。

○「自然流入によるもの」と判断された遺物…8個体

- ◇ST13とST14で接合関係にある遺物：3個体〔平瓶(E-53)・フラスコ形瓶(E-52・54)/第66表23~25〕
→墓前域が重複しており、重複箇所付近で接合破片が出土しているため、ST13からST14へ自然流入したと判断。
- ◇ST30とST31で接合関係にある遺物：4個体〔高台壺(E-75)・長頸壺(E-73)・平瓶(E-76)・甕(E-167)/第66表34~37〕
→墓前域が斜面の上下に位置しあつ接合破片が自然流入と想定しうる位置で出土しているため、ST31からST30へ自然流入したと判断。
- ◇ST38とSK49で接合関係にある遺物：1個体〔甕(E-180)/第66表43〕
→遺構が重複しており、重複箇所付近で接合破片が多く出土しているため、ST38からSK49へ自然流入したと判断。

○「自然流入の可能性があるもの」と判断された遺物…3個体

- ◇ST9とST21で接合関係にある遺物：1個体〔高台壺(E-45)/第66表9〕
→ST9・21は墓前域を共有している横穴墓。堆積過程で自然流入する可能性も否定できない状況であることから、意図的散布と断定できないと判断。
- ◇ST12とST13で接合関係にある遺物：1個体〔甕(E-147)/第66表22〕
→隣接する横穴墓で、接合破片の出土位置が自然流入する可能性も否定できない位置であることから、意図的散布と断定できないと判断。
- ◇ST12とST20で接合関係にある遺物：1個体〔盤(E-41)/第66表30〕
→墓前域が斜面の上下に位置し、堆積過程で自然流入する可能性も否定できない状況であることから、意図的散布と断定できないと判断。

○「意図的散布によるもの」と判断された遺物…44個体

- ◇上記以外の44個体。出土位置・破片の状況から須恵器の破碎散布行為によるものである可能性が高いと判断。

以上のとおり、遺構間接合遺物55個体のうち、11個体については自然流入またはその可能性があると判断した。ただし、この11個体に関しては、いずれも破片の状態で墓前域から出土した遺物であることから、墓前域での祭祀で破碎された遺物で、その破片が隣接遺構に自然流入したと想定される。

-小結1 遺物の出土状況、接合遺構の位置関係から見た様相-

人為的散布によると判断された遺構間接合遺物44個体の様相について、これまで確認した内容を改めて整理すると以下のとおりとなる。

- ①遺構間接合遺物は、54基中37基の横穴墓で確認。
- ②横穴墓の遺構間で接合する遺物は「須恵器」のみ。
- ③人為的に散布されたとみられる須恵器は44個体。
- ④遺構間接合遺物は基本的に墓前域で出土する。
- ⑤玄室内で出土したものが若干あるが、これらは墓前域から人為的に散布されたものと理解される。
- ⑥他の須恵器甕（遺構間接合しない甕）などと同様、破碎されバラバラになった破片の状態で出土。
- ⑦2遺構間での接合関係が最も多いが、最大6遺構間での接合関係もある。
- ⑧接合遺構の位置関係は、隣接するものから数十メートル離れたものなど様々。

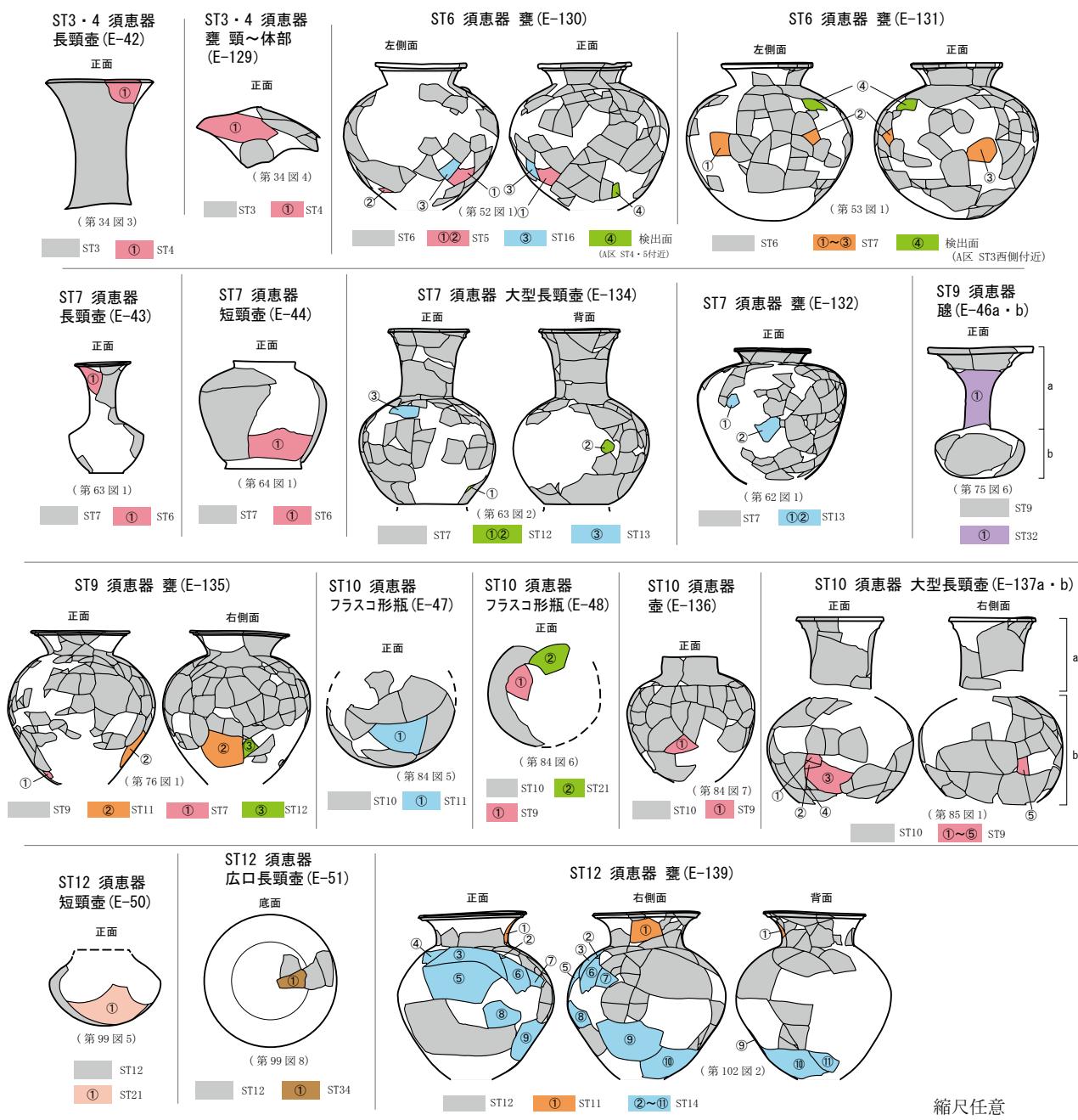
これらの①～⑧の内容把握から合戦原遺跡の遺構間接合、つまり遺物の破碎散布行為の特徴として指摘できることは、大きく3点ある。1点目は、当時の祭祀儀礼における破碎散布行為の対象となった遺物は須恵器に限定されていたことである。今回の金属製品を除外したため、全遺物とはまでは言えないが、それ以外の遺物と比較すれば明らかな事実である。2点目は、出土位置と出土状況から、それらは「墓前祭祀で使用された遺物」すなわち「墓前域で破碎された遺物」と考えられることである。ただし、この内容確認のみでは、接合破片の帰属遺構は特定できても、「どこの墓前域で破碎された遺物か」までは把握できない。この点については後述する。3点目は、距離が離れた遺構間接合の事例があることから、須恵器の破碎散布行為は、無作為な散布ではなく、散布先の横穴墓が意図的に選択されていた可能性が高いということである。須恵器の破碎散布行為については、各横穴墓の被葬者の血縁関係などを意識した「祖靈祭祀」が想定されているところ

ろであり、合戦原遺跡においてもそうした思想に基づいた散布行為が実施されていた可能性がある（大分県教育委員会 1991）。

以上のように、遺構間接遺物の出土状況と接合遺構の位置を把握することで、各遺構間の関係性を読み取ることができた。しかし、この情報のみでは「須恵器がどこで破碎され、どこの横穴墓に散布されたか」まで把握することができない。そこで、次に遺構間接合する個々の遺物から読み取れる情報をみていきたい。

【遺構間接合遺物の個体情報の整理】

ここでは遺構間接合遺物の個体から読み取れる情報を整理する。今回の遺物整理作業では、「どの部位の破片」が「どの遺構のものと接合」したかを確認するだけでなく、接合破片の遺構別点数の確認も重点的に行った。その作業結果から導き出された遺構間接合遺物の接合破片の内訳を第67～69表、人為的散布と判断された須恵器44個体の破片接合状況を第479～481図に示す。



第479図 合戦原遺跡横穴墓地区出土須恵器 遺構間接合遺物展開模式図(1)

第67表 合戦原遺跡横穴墓地区出土 遺構間接合遺物詳細一覧(1)

No	須恵器 器種※1	法量 ※2	主体 遺構	遺構間接合遺物内訳※3					備考	
				主体遺構※4		破碎破片が散布された遺構※5				
1	長頸壺 [E-42]	-	不明	接合遺構: 2	不明	ST3 (細別1層)	+	ST4 (検出面)	○口縁～頸部破片資料/主体遺構不明 ○別遺構から散布された遺物の可能性も有	
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 3		2		1		
				破片部位:		口縁～頸部		口縁部		
2	壺 [E-129]	-	不明	接合遺構: 2	不明	ST3 (細別1層)	+	ST4 (検出面)	○体部破片資料/主体遺構不明 ○別遺構から散布された遺物の可能性も有 ○ST3のうち玄室出土のものは1点のみ ○E129に類似する須恵器壺有 (非図化/Y-E-48・49)→ST3・4で遺構間接合	
				出土位置:		墓前域・玄室		墓前域		
				総破片数: 8		7		1		
				破片部位:		体部		体部		
3	壺 [E-130]	(35.9) × 43.1 2,880	ST6	接合遺構: 4	ST6 (大別3)	+	ST15 (大別2堆)	+	A区検出面 (ST4.5付近)	○E-130に類似する須恵器壺有 (非図化/Y-E-50) →ST5・6で遺構間接合
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 72		68		2		
				破片部位:		口縁～底部		体部		
4	壺 [E-131]	(42.1) × 45.3 5,640	ST6	接合遺構: 3	ST6 (大別3)	+	ST7 (大別2堆)	+	A区検出面 (ST3付近)	
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 81		77		3		
				破片部位:		口縁～底部		体部		
5	長頸壺 [E-43]	18.8 × 12.2 285	ST7	接合遺構: 2	ST7 (大別1)	+	ST6 (大別3堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 10		9		1		
				破片部位:		口縁～底部		口縁部		
6	短頸壺 [E-44]	19.4 × 22.6 950	ST7	接合遺構: 2	ST7 (大別1)	+	ST6 (大別3堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 12		11		1		
				破片部位:		口縁～底部		大部		
7	大型長頸壺 [E-134]	(42.9) × (33.8) 4,575	ST7	接合遺構: 3	ST7 (大別1)	+	ST12 (大別1堆)	+	ST13 (大別1堆)	○ST7のうち玄室出土のものは1点のみ →墓前域で破碎後、玄室内に散布？
				出土位置:		墓前域・玄室		玄室		
				総破片数: 95		92		2		
				破片部位:		口縁～底部		肩部		
8	壺 [E-132]	(44.6) × 50.2 3,925	ST7	接合遺構: 2	ST7 (大別1)	+	ST13 (大別1堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 100		98		2		
				破片部位:		口縁～体部		体部		
9	高台坏 [E-45]	5.1 × 16.3 375	ST9	接合遺構: 2	ST9 (大別1)	+	ST21 (大別1堆)			○ST9からST21に自然流入した可能性も有
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 5		3		2		
				破片部位:		口縁～底部		高台部		
10	醜 [E-46]	[17.7] × [12.2] 365	ST9	接合遺構: 2	ST9 (大別1)	+	ST32 (大別2堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 8		7		1		
				破片部位:		口縁～底部		頸部		
11	壺 [E-135]	(73.5) × 72.0 19,875	ST9	接合遺構: 4	ST9 (大別1)	+	ST7 (大別2堆)	+	ST11 (大別2堆)	○ST7のうち玄室出土のものは1点のみ →墓前域で破碎後、玄室内に散布？
				出土位置:		墓前域		玄室		
				総破片数: 140		137		1		
				破片部位:		口縁～体部		体部		
12	フ拉斯コ形瓶 [E-47]	-	ST10	接合遺構: 2	ST10 (大別1)	+	ST11 (大別2堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 13		12		1		
				破片部位:		体部				
13	フ拉斯コ形瓶 [E-48]	-	ST10	接合遺構: 3	ST10 (大別1)	+	ST9 (大別1堆)	+	ST21 (大別1堆)	○ST10出土の破片大 →ST10が主体遺構と判断
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 4		2		1		
				破片部位:		体部		体部		
14	壺 [E-136]	(26.6) × 27.6 2,260	ST10	接合遺構: 2	ST10 (大別1)	+	ST9 (大別1堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 48		47		1		
				破片部位:		口縁～体部		体部		
15	大型長頸壺 [E-137]	(41.4) × (34.6) 4,915	ST10	接合遺構: 2	ST10 (大別1)	+	ST9 (大別1堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 62		57		5		
				破片部位:		口縁～体部		体部		
16	短頸壺 [E-50]	(8.1) × 12.6 265	ST12	接合遺構: 2	ST12 (大別1)	+	ST21 (大別1堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 5		4		1		
				破片部位:		頸～底部		体部		
17	広口長頸壺 [E-51]	-	ST12	接合遺構: 2	ST12 (大別1)	+	ST34 (大別1堆)			
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 4		3		1		
				破片部位:		底部		底部		
18	壺 [E-139]	(61.0) × 54.8 11,290	ST12	接合遺構: 3	ST12 (大別1)	+	ST11 (大別2堆)	+	ST14 (大別1堆)	○類似破片(Y-E-115～120)有。 Y-E-115～120も遺構間接合遺物 ST12(大別1)+ST9(大別1堆) ST12(大別1)+ST20(大別1堆) ST12(大別1)+ST21(大別1堆)
				出土位置:		墓前域		墓前域		
				総破片数: 53		42		1		
				破片部位:		口縁～体部		頸部		

※1 「須恵器 器種」欄内に▲印があるものは自然流入の可能性もある遺物。●印があるものは自然流入と判断した遺物を示す。

※2 「法量」欄の数値は、上段:高さcm×中段:最大幅cm、下段:重量g、()表記は残存値、[]表記は推定値を示す。破片資料を除く資料の計測値を掲載。

※3 遺構間接合遺物内訳の「接合遺構」欄の(大別1)の表記は「大別1層の底面出土」、(大別1堆)の表記は「大別1層の堆積土中出土」を意味する。

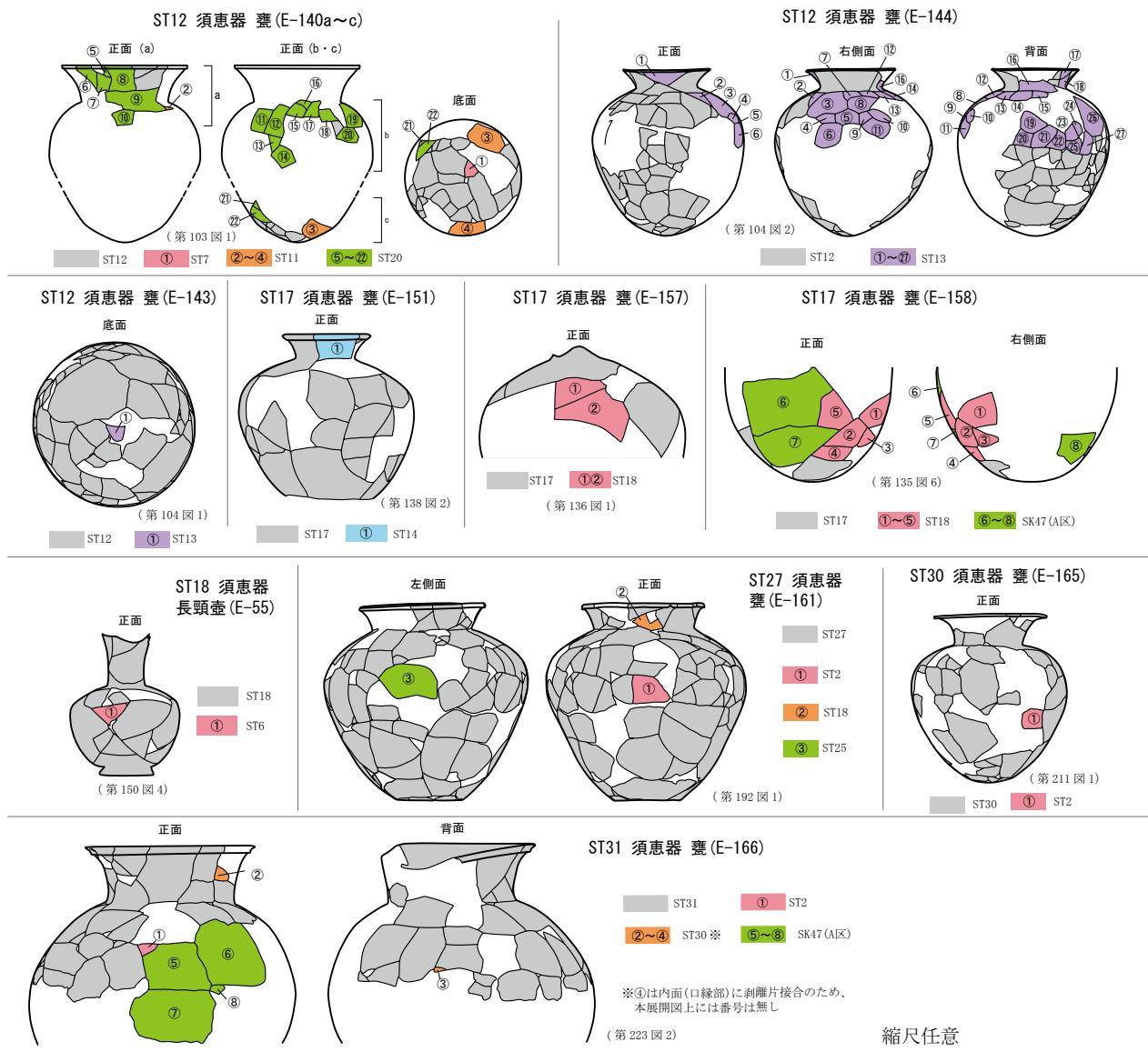
※4 「主体遺構」須恵器の破碎行為を行ったと考えられる遺構のこと。

※5 「破碎破片が散布された遺構」欄には上記※1の▲●印の遺物も便宜上掲載することとした。

-接合破片の内訳-

各遺物の接合破片の内訳をみてみると、第67～69表でも明らかにおり、今回の調査で出土した遺構間接合遺物は「構成する遺物破片数が特定の遺構に偏っているもの」が大半である。一例を挙げるならば、須恵器甕E-135の接合破片の内訳(第67表11)は、ST7出土破片1点、ST9出土破片137点、ST11出土破片1点、ST12出土破片1点となっている。この点数の偏りは何を意味するのだろうか。

筆者は「遺構間接合遺物を構成する破片が最も多く出土した遺構」＝「その須恵器の破碎の場」と考えている。先に示したE-135の須恵器甕であれば、この甕は「構成する破片が最も多く出土」したST9の墓前祭祀で破碎され、ST9からST7・11・12の3基の横穴墓に意図的に散布されたと想定したい。さらにその出土層位情報を受け加えると、E-135の甕は「ST9の墓前域大別1層底面で破碎され、ST7の大別2層・ST11の大別2層・ST12の大別3層の堆積段階に散布された」と考えることができる。甕を破碎すればその場に多量の破片が散らばる。そして、その破片の一部を別の横穴墓に意図的に散布する。この一連の行為の結果、横穴墓間でまたがる須恵器の接合関係が生まれる。無理のない想定ではないだろうか。なお、第67～69表を見る限り、主体遺構から別横穴墓に散布された破片は数点程度の事例が多いようである。一度の破碎散布行為で散布された破片は数点程度であった可能性が高い。



第480図 合戦原遺跡横穴墓地区出土須恵器 遺構間接合遺物展開模式図(2)

第68表 合戦原遺跡横穴墓地区出土 遺構間接合遺物詳細一覧(2)

No	須恵器種※1	法量※2	主体遺構	遺構間接合遺物内訳※3					備考
				主体遺構※4		破片が散布された遺構※5			
19	甕 [E-140]	(69.2) × (68.5) 7,330	ST12	接合遺構: 4 出土位置: 総破片数: 50 破片部位:	ST12 (大別1) 墓前域・玄室	+ ST7 (大別2堆) 墓前域	+ ST11 (大別2堆) 墓前域	+ ST20 (大別1堆) 墓前域	○ST12のうち玄室出土のものは1点のみ →墓前域で破碎後、玄室内に散布?
20	甕 [E-143]	(41.0) × 40.0 6,210		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 102 破片部位:	ST12 (大別1) 墓前域	+ ST13 (大別1堆) 墓前域			
21	甕 [E-144]	46.1 × 43.6 5,700		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 114 破片部位:	ST12 (大別1) 墓前域	+ ST13 (大別1堆) 墓前域			○E-144に類似する須恵器破片有 (非図化/Y・E-121) →ST12・13で遺構間接合
22	▲ 甕 [E-147]	-		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 38 破片部位:	ST13 (大別1) 墓前域	+ ST12 (大別1堆) 墓前域			
23	● 平瓶 [E-53]	-	ST13	接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 4 破片部位:	ST13 (大別1) 墓前域	+ ST14 (大別1堆) 墓前域			○ST13からST14に自然流入した遺物
24	● フラスコ形瓶 [E-52]	-		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 38 破片部位:	ST13 (大別1) 墓前域	+ ST14 (大別1堆) 墓前域			
25	● フラスコ形瓶 [E-54]	-		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 2 破片部位:	ST13 (大別1) 墓前域	+ ST14 (大別1堆) 墓前域			
26	▲ 甕 [E-157]	-		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 5 破片部位:	ST17 (大別1) 墓前域	+ ST18 (大別2堆) 墓前域			
27	▲ 甕 [E-158]	-	ST17	接合遺構: 3 出土位置: 総破片数: 14 破片部位:	ST17 (大別1) 墓前域	+ ST18 (大別2堆) 墓前域	+ SK47 (1層) 土坑内		○E-157と類似 ○E-158に類似する須恵器甕破片有 (非図化/Y・E-147) →ST17・18で遺構間接合
28	▲ 甕 [E-151]	(43.1) × 47.6 5,935		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 31 破片部位:	ST17 (大別2) 墓前域	+ ST14 (大別1堆) 墓前域			
29	長頸壺 [E-55]	(22.3) × 17.4 1,140	ST18	接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 19 破片部位:	ST18 (大別4) 墓前域	+ ST6 (大別4堆) 墓前域			
30	▲ 盤 [E-41]	(5.1) × [24.0] 325		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 5 破片部位:	ST20 (大別1) 墓前域	+ ST12 (大別1堆) 墓前域			
31	▲ 甕 [E-161]	53.4 × 56.0 15,345	ST27	接合遺構: 4 出土位置: 総破片数: 142 破片部位:	ST27 (大別1) 墓前域・玄室	+ ST2 (大別1堆) 墓前域	+ ST18 (大別2堆) 墓前域	+ ST25 (大別1堆) 墓前域	○ST27のうち玄室出土のものは2点のみ →墓前域で破碎後、玄室内に散布?
32	▲ 甕 [E-165]	(59.1) × 55.0 13,745		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 96 破片部位:	ST30 (大別2) 墓前域	+ ST2 (大別2堆) 墓前域			
33	▲ 甕 [E-166]	(49.2) × 67.5 10,300		接合遺構: 4 出土位置: 総破片数: 61 破片部位:	ST31 (大別1) 墓前域	+ ST2 (大別1堆) 墓前域	+ ST30 (大別1堆) 墓前域	+ SK47 (1層) 土坑内	
34	● 高台壺 [E-75]	(6.4) × 21.0 300		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 15 破片部位:	ST31 (大別2) 墓前域	+ ST30 (大別2堆) 墓前域			
35	● 長頸壺 [E-73]	(26.5) × 17.0 985	ST31	接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 69 破片部位:	ST31 (大別2) 墓前域	+ ST30 (大別2堆) 墓前域			○ST31からST30に自然流入した遺物
36	● 平瓶 [E-76]	16.5 × [23.3] 2,015		接合遺構: 2 出土位置: 総破片数: 25 破片部位:	ST31 (大別2) 墓前域	+ ST30 (大別2堆) 墓前域			
					ST31 (大別2) 墓前域	+ ST30 (大別2堆) 墓前域			
					ST31 (大別2) 墓前域	+ ST30 (大別2堆) 墓前域			

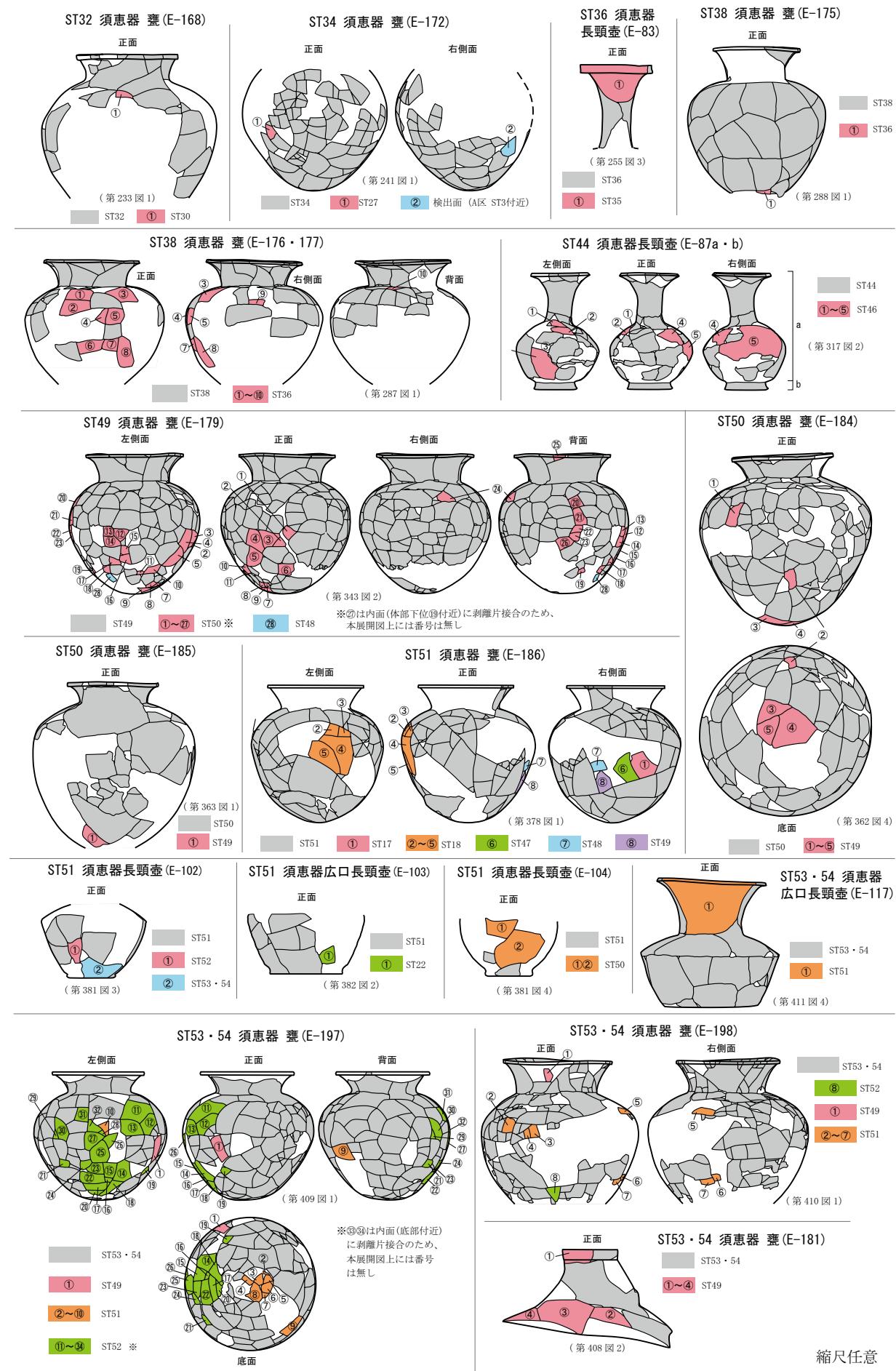
※1 「須恵器 器種」欄内に▲印があるものは自然流入の可能性もある遺物、●印があるものは自然流入と判断した遺物を示す。

※2 「法量」欄の数値は、上段:高さcm×中段:最大幅cm、下段:重量g、()表記は残存値、[]表記は推定値を示す。破片資料を除く資料の計測値を掲載。

※3 遺構間接合遺物内訳の「接合遺構」欄の大別1層の底面出土)、(大別1堆)の表記は「大別1層の底面出土」、(大別1堆)の表記は「大別1層の堆積土中出土」を意味する。

※4 「主体遺構」:須恵器の破碎行為を行ったと考えられる遺構のこと。

※5 「破碎破片が散布された遺構」欄には上記※1の▲●印の遺物も便宜上掲載することとした。



第481図 合戦原遺跡横穴墓地区出土須恵器 遺構間接合遺物展開模式図(3)

第69表 合戦原遺跡横穴墓地区出土 遺構間接合遺物詳細一覧(3)

No	須恵器種※1	法量※2	主体遺構	遺構間接合遺物内訳※3							備考
				主体遺構※4 破片が散布された遺構※5							
37	● 蓋 [E-167]	(30.1) × [38.0] 1,290	ST31	接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 30 破片部位: 口縁～体部	ST31 (大別2) + ST30 (大別2堆) 墓前域 26 4						○ST31からST30に自然流入した遺物 ○類似破片(非図化/Y・E-192)有→ST30・31で遺構間接合
38	蓋 [E-168]	(55.4) × 73.0 11,980		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 50 破片部位: 口縁～体部	ST32 (大別1) + ST30 (大別2堆) 墓前域 49 1						
39	蓋 [E-172]	(55.5) × 65.8 7,560		接合遺構: 3 出土位置: 墓前域 総破片数: 79 破片部位: 口縁～底部	ST34 (大別1) + ST27 (大別3堆) 墓前域 77 1 1	+ A区検出面 (ST3付近)					
40	長頸壺 [E-83]	-		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 4 破片部位: 口縁～頸部	ST36 (大別1) + ST35 (大別1堆) 墓前域 3 1						
41	蓋 [E-176] [E-177]	(97.3) × 69.0 8,040	ST38	接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 61 破片部位: 口縁～体部	ST38 (大別1) + ST36 (大別1堆) 墓前域 51 10						○ST38からSK49に自然流入した遺物
42	蓋 [E-175]	(44.9) × 43.0 9,725		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 54 破片部位: 口縁～体部	ST38 (大別3) + ST36 (大別1堆) 墓前域 53 1						
43	● 蓋 [E-180]	-		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 28 破片部位: 体部～底部	ST38 (大別3) + SK49 (1・2層) 墓前域 12 16						
44	長頸壺 [E-87]	[25.6] × 18.0 1,840		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 42 破片部位: 口縁～底部	ST44 (大別1) + ST46 (大別1堆) 墓前域 37 5						
45	蓋 [E-179]	(73.3) × 74.0 4,535	ST49	接合遺構: 3 出土位置: 墓前域 総破片数: 194 破片部位: 口縁～底部	ST49 (大別1) + ST48 (大別1堆) 墓前域 166 1 27	+ ST50 (大別2堆)					○ST50はST49から自然流入 ○類似破片(非図化/Y・E-229)有→ST49・50で遺構間接合
46	蓋 [E-184]	42.8 × 43.4 7,010		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域・玄室 総破片数: 170 破片部位: 口縁～底部	ST50 (大別2) + ST49 (大別1堆) 墓前域・玄室 165 5						
47	蓋 [E-185]	44.0 × (45.4) 6,485		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 112 破片部位: 口縁～底部	ST50 (大別2) + ST49 (大別1堆) 墓前域 111 1						
48	長頸壺 [E-102]	(11.4) × 17.4 500		接合遺構: 3 出土位置: 墓前域 総破片数: 14 破片部位: 体部～底部	ST51 (大別1) + ST52 (大別1堆) 墓前域 12 1 1	+ ST53・54 (大別4堆) 墓前域 1 1					
49	長頸壺 [E-104]	(9.0) × (15.4) 105	ST51	接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 4 破片部位: 底部	ST51 (大別1) + ST50 (大別2堆) 墓前域 2 2						○ST50のうち玄室出土のものは2点のみ→墓前域で破碎後、玄室内に散布？
50	広口長頸壺 [E-103]	(12.4) × [24.2] 440		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 10 破片部位: 体部～底部	ST51 (大別1) + ST52 (堆積土) 墓前域 9 1						
51	蓋 [E-186]	[72.3] × 68.8 22,550		接合遺構: 6 出土位置: 墓前域 総破片数: 127 破片部位: 口縁～底部	ST51 (大別1) + ST17 (大別2堆) 墓前域 119 1 4	+ ST18 (大別2堆) 墓前域 1 1	+ ST47 (大別1堆) 墓前域 1 1	+ ST48 (大別1堆) 墓前域 1 1	+ ST49 (大別1堆) 墓前域 1 1		
52	広口長頸壺 [E-117]	(20.8) × 21.2 1,885	ST53 ST54	接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 30 破片部位: 口縁～底部	ST53・54 (大別3) + ST51 (大別1堆) 墓前域 29 1						○遺物の出土状況・層位から主体遺構を判断
53	蓋 [E-181]	-		接合遺構: 2 出土位置: 墓前域 総破片数: 7 破片部位: 口縁～底部	ST53・54 (大別3) + ST49 (大別1堆) 墓前域 3 4						
54	蓋 [E-197]	77.8 × 80.5 32,855	ST53 ST54	接合遺構: 4 出土位置: 墓前域 総破片数: 175 破片部位: 口縁～底部	ST53・54 (大別3) + ST49 (大別1堆) 墓前域 141 1 9 24	+ ST51 (大別1堆) 墓前域 1 9 24	+ ST52 (大別1堆) 墓前域 6 1				○類似破片(非図化/Y・E-295)有→ST51と53・54で遺構間接合
55	蓋 [E-198]	(65.0) × 69.0 18,245		接合遺構: 4 出土位置: 墓前域 総破片数: 311 破片部位: 口縁～体部	ST53・54 (大別3) + ST49 (大別1堆) 墓前域 303 1 6 1	+ ST51 (大別1堆) 墓前域 1 6 1	+ ST52 (大別1堆) 墓前域 6 1				

※1~5:第67・68表と同じ

以上のように、遺構間で接合する遺物が「どこで破碎され、どこから、どこに散布されたか」に論及するためには、この接合破片数の把握は必要不可欠な作業である。横穴墓における遺構間接合遺物は、「ある特定の遺構で破碎され、その破片の一部が別の横穴墓に意図的に散布された遺物」である。本書では須恵器の破碎行為を行った「ある特定の遺構」を「主体遺構」と呼ぶ。遺構間接合遺物の破片内訳を把握することで、「遺物を構成する破片が最も多く出土した遺構」つまり、遺物の「主体遺構」を特定することが可能になる。この「主体遺構」と「破碎された須恵器破片の散布先(以下、散布遺構という)」を特定することは、当時の祭祀儀礼の把握だけなく、「重複関係のない各横穴墓の新旧関係と併行関係」の理解にもつながる。これまで各地で行われた遺構間接合遺物の報告において、遺物の接合破片の具体的状況にまで踏み込んでいる例は極めて少ない。本稿で示したとおり、遺構間接合遺物の持つ情報量は計り知れないものがある。遺物接合作業の初期段階から、こうした接合点数の内訳を意識した整理を行うことで、さらなる遺構間の新旧関係の推定が可能となる。この内容把握は手間のかかる作業であることは間違いないが、重複しない遺構間の関係を把握する上で極めて重要な作業であると指摘しておきたい(註2)。

-破碎散布される器種とその部位-

自然流入の可能性がある遺物を除く遺構間接合遺物 44 個体の器種内訳は、甕 26 個体、長頸壺 7 個体、フラスコ瓶 2 個体、広口長頸壺 3 個体、大型長頸壺 2 個体、短頸壺 2 個体、穂 1 個体、壺 1 個体である。甕が全体の 6 割(26 個体)を占めるが、長頸壺などの壺瓶類(18 個体)も全体の 4 割ほどある。甕主体というよりは壺瓶類も一定量使用されたと言えよう。なお、横穴墓群全体の出土須恵器(図示遺物)でみると、壺瓶類は 87 点中 18 個体、甕は 67 点中 26 個体が破碎散布された遺物となっている。甕に関しては法量の違いによる使い分けなどの傾向は認められなかった。

散布された遺物の部位は第 479~481 図のとおり、口縁部、頸部、体部、底部など様々である。部位に偏りはみられない。合戦原遺跡では特定器種の特定部位を選択して散布したというよりは、破片の散布自体に意味があったと捉えるべきだろう。

-小結 2 遺構間接合遺物の個体情報から見た様相-

須恵器破碎散布が実施されたと判断される例は 44 個体あった。詳細が不明な ST3・4 の 2 例を除いた 42 個体について、遺物本体から得られた情報をもとに、須恵器が破碎された「主体遺構」と、破碎破片が人為的に散布された「散布遺構」に仕分けし、遺構との関係を再整理したものが第 70 表になる。

第 70 表によると、合戦原遺跡における須恵器破碎散布行為は、**ST6 大別 3 層底面**(破碎散布器種:2 個体)、**ST7 大別 1 層底面**(破碎散布器種:4 個体)、**ST9 大別 1 層底面**(破碎散布器種:2 個体)、**ST10 大別 1 層底面**(破碎散布器種:4 個体)、**ST12 大別 1 層底面**(破碎散布器種:6 個体)、**ST17 大別 1 層底面**(破碎散布器種:2 個体)・**大別 2 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST18 大別 4 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST27 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST30 大別 2 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST31 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST32 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST34 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST36 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST38 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)・**大別 3 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST44 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST49 大別 1 層底面**(破碎散布器種:1 個体)、**ST50 大別 2 層底面**(破碎散布器種:2 個体)、**ST51 大別 1 層底面**(破碎散布器種:4 個体)、**ST53・54 大別 3 層底面**(破碎散布器種:4 個体)で実施されたことが分かる。つまり、19 遺構、21 の祭祀面で実施された破碎散布行為と整理される。

これらの破碎散布行為を行った墓前祭祀は、「初葬時」「追葬時」「非埋葬時(埋葬に関わらない墓前祭祀)」の 3 類型に分けられるが、追葬時または非埋葬時に実施された事例が多い。そして、これらの須恵器の破碎散布行為は 7 世紀末以降に開始され、8 世紀後半頃まで実施されていたと理解される。なお、第 70 表から導き出される各遺構の前後関係については、第 5 章第 5 節で改めて提示することしたい。

第70表 合戦原遺跡横穴墓地区における須恵器破碎散布行為一覧

No	須恵器を破碎した遺構 (主体遺構)				→	破碎破片が散布された遺構 (散布遺構)		主体遺構から散布された 須恵器器種(登録No)・破片数
	遺構番号	破碎散布器種・個体数	個体数	破碎面 (破碎時期※1)		出土遺構大別層位/位置 ※3	破片数	
1	ST6	甕2	2	大別3層 底面 (8c前葉～中葉)	A	ST5大別2層堆/墓前域	2	甕(E-130)2点
						ST7大別2層堆/墓前域	3	甕(E-131)3点
						→ ST16大別1層堆/墓前域	1	甕(E-130)1点
						検出面(ST3付近)	1	甕(E-131)1点
						検出面(ST4・5付近)	1	甕(E-130)1点
2	ST7	長頸壺1/短頸壺1 大型長頸壺1/甕1	4	大別1層 底面 (7c末～8c中)	C	ST6大別3層堆/墓前域	2	長頸壺(E-44)1点/短頸壺(E-43)1点
						→ ST12大別1層堆/玄室	2	大型長頸壺(E-134)2点
						ST13大別1層堆/墓前域	3	大型長頸壺(E-134)1点/甕(E-132)2点
3	ST9	甕1/甕1	2	大別1層 底面 (7c末～8c初)	B	ST7大別2層堆/墓前域	1	甕(E-135)1点
						→ ST11大別2層堆/墓前域	1	甕(E-135)1点
						ST12大別3層堆/玄室	1	甕(E-135)1点
						ST32大別2層堆/墓前域	1	甕(E-46)1点
4	ST10	プラスコ形瓶2/壺1 大型長頸壺1	4	大別1層底面 (7c末～8c初)	BorC	ST9大別1層堆/墓前域	7	プラスコ形瓶(E-48)1点/壺(E-136)1点
						→ ST11大別2層堆/墓前域	1	プラスコ形瓶(E-47)1点
						ST21大別1層堆/墓前域	1	プラスコ形瓶(E-48)1点
5	ST12	短頸壺1 広口長頸壺1 甕4	6	大別1層底面 (7c後葉～8c中葉)	B	ST7大別2層堆/墓前域	1	甕(E-140)1点
						ST9大別1層堆/墓前域	-	※ST9とST12出土甕破片(非図化)接合
						ST11大別2層堆/墓前域	4	甕(E-139)1点/甕(E-140)3点
						ST13大別1層堆/墓前域	28	甕(E-143)1点/甕(E-144)27点
						ST14大別1層堆/墓前域	10	甕(E-139)10点
						ST20大別1層堆/墓前域	18	甕(E-140)18点
						ST21大別1層堆/墓前域	1	短頸壺(E-50)1点
6	ST17	甕2	2	大別1層底面 (8c後半～9c初)	C	ST18大別2層堆/墓前域	7	甕(E-157)2点/甕(E-158)5点
						SK47・1層	3	甕(E-158)3点
						甕1	1	甕(E-151)1点
7	ST18	長頸壺1	1	大別4層底面 (7c末～8c初)	BorC	ST6大別4層堆/墓前域	1	長頸壺(E-55)1点
8	ST27	甕1	1	大別1層底面 (8c後半)	C	ST2大別1層堆/墓前域	1	甕(E-161)1点
						ST18大別2層堆/墓前域	1	甕(E-161)1点
						ST25大別1層堆/墓前域	1	甕(E-161)1点
9	ST30	甕1	1	大別2層底面 (7c後葉～8c初)	B	ST2大別2層堆/玄室	1	甕(E-165)1点
						ST32大別1層堆/墓前域	-	※ST30とST32出土 甕破片(非図化)接合
10	ST31	甕1	1	大別1層底面 (8c後半以降)	C	ST2大別1層堆/墓前域	1	甕(E-165)1点
						ST30大別1層堆/墓前域	3	甕(E-165)3点
						SK47・1層	4	甕(E-165)4点
11	ST32	甕1	1	大別1層底面 (7c末～8c中葉以降)	C	ST30大別2層堆/墓前域	1	甕(E-168)1点
12	ST34	甕1	1	大別1層底面 (7c末～8c初)	C	ST27大別3層堆/墓前域	1	甕(E-172)1点
						検出面(ST3付近)	1	甕(E-172)1点
13	ST36	長頸壺1	1	大別1層底面 (8c前葉～中葉)	BorC	ST35大別1層堆/墓前域	1	長頸壺(E-83)1点
14	ST38	甕1	1	大別1層底面 (8c前葉～中葉)	C	ST36大別1層堆/墓前域	10	甕(E-176・177)10点
						甕1	1	甕(E-175)1点
15	ST44	長頸壺1	1	大別1層底面 (7c末～8c前半)	A	ST46大別1層堆/墓前域	5	長頸壺(E-87)5点
16	ST49	甕1	1	大別1層底面 (7c末～8c初)	BorC	ST48大別1層堆/墓前域	1	甕(E-179)1点
17	ST50	甕2	2	大別2層底面 (8c前葉)	C	ST49大別1層堆/墓前域	6	甕(E-184)5点 甕(E-185)1点
18	ST51	長頸壺2 広口長頸壺1 甕1	4	大別1層底面 (8c前葉～中葉)	B	ST17大別2層堆/墓前域	1	甕(E-186)1点
						ST18大別2層堆/墓前域	4	甕(E-186)4点
						ST22玄室堆積土	1	広口長頸壺(E-103)1点
						ST47大別1層堆/墓前域	1	甕(E-186)1点
						ST48大別1層堆/墓前域	1	甕(E-186)1点
						ST49大別1層堆/墓前域	1	甕(E-186)1点
						ST50大別2層堆/墓前域	2	長頸壺(E-104)2点
						ST52大別1層堆/墓前域	1	長頸壺(E-102)1点
19	ST53 ST54	広口長頸壺1 甕3	4	大別3層底面 (8c中葉)	C	ST53・54大別4層堆/墓前域	1	長頸壺(E-102)1点
						ST49大別1層堆/墓前域	5	甕(E-181)4点/甕(E-198)1点
						ST49大別1層堆/玄室	1	甕(E-197)1点
						ST51大別1層堆/墓前域	16	広口長頸壺(E-117)1点 甕(E-197)9点/甕(E-198)6点
						ST52大別1層堆/墓前域	25	甕(E-197)24点/甕(E-198)1点

※1 年代は第5章第1節土器総括参照。

※2 祀祭祀類型…A:初葬に伴う墓前祭祀の可能性が高いもの/B:追葬に伴う墓前祭祀の可能性が高いもの/C:埋葬に関わらない墓前祭祀

※3 出土遺構大別層位/位置の欄:「大別1層堆」の表記は「大別1層の堆積土中出土」、「大別1層検」は「大別1層上面の検出面出土」を示す。

(3)まとめ—合戦原遺跡の遺構間接合遺物の様相—

遺構間接合遺物の出土状況と接合遺構の確認、そして遺物の個別情報の精査を行いながら、合戦原遺跡横穴墓群における「須恵器の破碎散布行為」について整理してきた。その様相をまとめる。

【合戦原遺跡の遺構間接合遺物の特徴】

これまで確認してきた合戦原遺跡の横穴墓群における須恵器の破碎散布行為の様相は以下とおりである。

- ①遺構間接合遺物は54基中37基の横穴墓(ST2~7、9~14、16~18、20~22、25、27、30~32、34~36、38、44、46~53・54)で確認。
- ②須恵器のみが遺構間接合している。土器類のうち、破碎散布行為の対象とされたのは須恵器に限定されていた可能性が高い。
- ③図示できた遺構間接合遺物総数は55個体。
- ④図示した遺構間接合遺物の総破片数3,060点。出土位置の内訳は玄室出土40点、墓前域出土3,020点。
- ⑤他の須恵器甕(遺構間接合しない甕)などと同じように破片の状態で出土。
- ⑥接合関係にある遺構数の内訳は、2遺構間接合:39例、3遺構間接合:8例、4遺構間接合:7例、6遺構間接合:1例。うち44例が人為的に破碎され散布されたものと考えられる。
- ⑦破碎散布と判断された須恵器の器種は主に甕・壺瓶類。内訳は甕26個体、長頸壺7個体、フラスコ瓶2個体、広口長頸壺3個体、大型長頸壺2個体、短頸壺2個体、甕1個体、壺1個体で、甕:壺瓶類の比率は6:4となる。
- ⑧接合破片の点数把握の結果、遺構間接合遺物を構成する破片の大半が特定の遺構に偏る場合が多いことを確認。接合破片数が多い遺構(主体遺構)で須恵器の破碎行為を実施したと判断。
- ⑨上記⑧の想定に基づき主体遺構を整理。結果、須恵器の破碎行為はST6、7、9、10、12、17、18、27、30、31、32、34、36、38、44、49、50、51、53・54の19の主体遺構(横穴墓)の墓前域で実施され、その後、その破片の一部が別の横穴墓に散布されたと判断。
- ⑩破碎破片の散布遺構(横穴墓)は近隣に位置することが多いが、60m以上離れた横穴墓に散布されるケースがある。散布先の横穴墓は意図的に選択されていた可能性が高い。
- ⑪一度に散布された破片は1~28点と様々であるが、10点に満たない例が多い。また、散布された破片は、口縁部・頸部・体部・底部など様々であり、特定部位に偏る傾向は認められない。破片を散布する行為自体に意味があった可能性が高い。
- ⑫須恵器の破碎散布行為は7世紀末以降から始まり、8世紀後半頃まで実施された。
- ⑬遺構間接合遺物の整理にあたっては、接合遺構の確認のみならず、個体ごとの接合破片の数量・接合遺構の把握も行うことで、「主体遺構」「散布遺構」の特定が可能になる。

【須恵器の破碎散布行為の系譜と導入の背景】

合戦原遺跡での須恵器破碎散布を伴う祭祀儀礼は7世紀末頃から始まる。最後に、その系譜と導入の背景について、本横穴墓群出土土器全体の様相を整理した上で考えてみたい。

本横穴墓群では土器類の大半が墓前域で出土している。土器群の詳細については第5章第1節1の土器総括に譲るが、その土器組成を概観すると、①7世紀前葉・7世紀中葉～後葉の段階:土師器主体、須恵器の出土はごく稀(土師器主体期)→②7世紀末～8世紀前葉:土器組成に占める須恵器の割合が高くなる(須恵器

本格導入期) → ③8世紀中葉～後半頃：須恵器主体の土器組成(須恵器主体期)、といった経過をたどる。合戦原遺跡における「須恵器の破碎散布行為」の開始は、上記②段階、7世紀末頃の「須恵器本格導入期」とほぼ一致する。そして、この破碎散布行為は上記③段階の8世紀後半頃まで続いている。ここで注目しておくべきことが2点ある。1点目は、合戦原遺跡での須恵器破碎散布行為の導入は横穴墓群築造の初期段階ではなかったということである。横穴墓造営の初期段階では行われていなかった儀礼が須恵器の本格導入に併せて取り入れられたと捉えることができる。2点目は、須恵器の破碎散布行為は7世紀末の導入以後、8世紀後半までの長期間にわたり実践されていたということである。儀礼導入後、44例に及ぶ事例が確認されておりことからみて、須恵器の破碎散布行為は本横穴墓群で一般化した儀礼となっていたことが窺える。

合戦原遺跡で行われた破碎散布行為の源流はどこにあるのか。先にも示したとおり、古墳や横穴墓での須恵器破碎散布行為は、西日本、特に北九州地方・山陰地方で多くみられる儀礼である。具体例を挙げるならば、大分県中津市上ノ原横穴墓群(大分県教育委員会1990・1991)、福岡県福岡市堤ヶ浦古墳群(福岡市教育委員会1987)・大野城市王城山C古墳群(福岡県教育委員会1977)、島根県松江市島田池横穴墓群(島根県教育委員会1997)・出雲市上塩治横穴墓群第40支群(出雲市市民文化財部文化財課2016)、鳥取県米子市陰田横穴墓群(米子市教育委員会1984)などがある。これらのうち、代表的な事例である上ノ原横穴墓群と島田池横穴墓群の様相をみてみたい。

上ノ原横穴墓群は5世紀後半頃から横穴墓の造営が開始された初現期横穴墓である。国道建設に伴う発掘調査(昭和55～60年)で81基の横穴墓が精査されており、複数の横穴墓にまたがる須恵器の破碎散布行為が確認されている。遺構間接合遺物は横穴墓の前庭・墓道部で出土しており、30個体を超える。器種は甕・壺類の占める割合が高く、その破碎散布行為は、横穴墓造営初期の段階からではなく6世紀以降に開始されたことが指摘されている。

島田池遺跡は6世紀後半から7世紀に造営された後背墳丘を伴う横穴墓で、平成6～7年に国道建設に伴う発掘調査が実施された。39基の横穴墓と10基以上の後背墳丘が精査され、横穴墓間または横穴墓と後背墳丘間などで出土した須恵器の遺構間接合が報告されている。遺構接合遺物は須恵器の甕・横瓶に限られており、遺構間での破片が接合するもの、または同一個体とみられる須恵器が別遺構で出土しているものが50点以上確認されている。

この上ノ原・島田池両者の報告では個体ごとの接合破片数についても言及されており、破片数の多い遺構と少ない遺構に分けられることが指摘されている。祭祀儀礼の時期に違いはあるものの、このような様相は合戦原遺跡の事例に酷似している。また、上ノ原・島田池両者の横穴墓は緩やかな斜面に立地し、墓前域が細長い溝状を呈しており、横穴墓の立地・構造上の面でも合戦原遺跡と共通点が多い。

以上のように、合戦原遺跡の横穴墓群で執り行われた須恵器の破碎散布行為の源流は北九州・山陰地方に求めることができそうである。ただし、合戦原遺跡での儀礼導入が7世紀末以降であることを考慮すると、その祭祀儀礼が直接的に西日本から伝播したのか、それとも関東・東海地方など、別の地域を経由して伝わったものかは判断が難しい。東北地方の宮城・福島県域の横穴墓では、須恵器甕を使用した祭祀は多く確認されているものの、遺構間接合つまり破碎散布行為を検証した例は極めて少ない(註3)。このような現状の中、多数の遺構間接合を確認した合戦原遺跡の事例は、東北地方の中では特異な部類に属する。その系譜の究明に関しては周辺の事例増加を待つ必要がある。現段階では、合戦原遺跡での須恵器破碎散布行為は、西日本の影響によるものと想定するに留めておくこととしたい。

合戦原遺跡での須恵器の破碎散布行為は、出土土器の年代と土器組成の状況からみて、7世紀末頃の「墓前祭祀への須恵器本格導入」を契機に開始されたことは間違いない事実と言える。では、この須恵器破碎散布行為の導入にはどのような背景があったのだろうか。そこで参考になるのが、須恵器本格導入以後の土器組成である。この時期以降の本横穴墓群での出土須恵器には、在地産とみられる個体が多く含まれるように

なる。そして、多くの須恵器が突如、墓前祭祀に多用されるようになる。こうした在地産須恵器の存在と使用須恵器の量的増加の事実は、在地の須恵器生産開始が示唆されるだけでなく(註4)、須恵器破碎散布儀礼との密接な関係も想定されるところである(註5)。加えて、この7世紀末という時期は、当該地域で鉄生産が開始された時期にもあたる。本横穴墓群の「須恵器の破碎散布行為導入時期」が当該地域への製鉄・窯業技術の導入時期と重なっている点は興味深い(註6)。「墓前祭祀への須恵器本格導入時期」と「当地域への須恵器本格導入時期」が重なることは、須恵器絶対数急増の点からみて当然の現象と言える。しかしながら、本遺跡でみられた「土師器は須恵器導入前にも後にも一貫して破碎散布の対象とはみなされなかつた」「須恵器は本格導入当初から破碎散布の対象とみなされ、それが以後も長く続いた」という特徴的な現象は、単なる須恵器の量的増加のみで説明できるものでない。古墳や横穴墓で使用される土器の意味については諸説あるが、当遺跡の事例は「土器を使用した祭祀儀礼」を考える上で貴重な例として強調しておきたい。

第5章第1節2 註

- 1) 古墳や横穴墓で出土する土器については、古事記や日本書紀にみられる「ヨモツヘグイ」「コトドワタシ」などの記事に関連する葬送儀礼に使用されたと考えられている(小林1949、白石1975、亀田1977)。
- 2) 出土遺物の接合作業は、原則、全ての遺物に遺跡名・出土遺構・出土層位等の情報を注記した上で実施されるため、報告書刊行後であっても遺物の内容確認は可能と思われるがちである。一般的に土器類の場合、遺物への注記は土器裏面に行われる。細片の場合は注記すら行われないケースもある。よって、完形に近い壺瓶類や甕類となると、接合作業完了後に破片1点1点の注記情報を確認することは極めて困難になる。注記内容の再確認は遺物の解体などを実施すればできなくもないが、遺物の所有者以外の第三者がそれを行うことはほぼ不可能と言える。したがって、今回のような「遺構間接合遺物」については、報告書で具体的な接合状況を提示しなければ、その詳細は整理担当者しか知りえない情報となってしまう。単に遺構間接合をした事実のみを記載すること、それは客観性に欠ける報告と考える。本書で報告したような接合破片の各種データは、現地調査の土層記録などと同じ性質のものと言っても過言ではなく、筆者としてはこの情報提示は必須であったと判断している。なお、今回情報提示のために費やした労力は通常の遺物整理とは比較にならないものであった。具体的には通常の2倍以上の期間と労力を要すこととなったが、その整理期間確保のための関係機関との調整にも多大な労力を費やしたこととは言うまでもない。しかし、先にも述べたとおり、この遺構間接合の確認作業は発掘調査報告書作成のための必須作業であることは間違いない、むしろ、整理作業着手前の「業務期間の算定」の際に「遺構間接合の確認作業」を含めないまま期間設定をしてしまっていたことにそもそも問題があったと反省している。遺物出土量の内容にもよるが、今後、横穴墓の調査、特に遺物整理にあたっては、遺構間接合関係の確認作業も業務期間に含めた上で適切な期間算定を行うべきと考えている。本事例がその算定の参考になれば幸いである。
- 3) 宮城県・福島県の横穴墓で須恵器甕が祭祀に使用されている事例は比較的多く確認されている。しかしながら、須恵器の遺構間接合が報告されている例は、筆者の知る限り、合戦原遺跡の例を除くと、亘理町桜小路横穴墓群(亘理町教育委員会1981)、南相馬市西迫横穴墓群(南相馬市教育委員会2019)の2例のみである。桜小路横穴墓群では9号横穴墓の羨道部出土の長頸壺体部破片が隣接する19号横穴墓玄室出土の破片と接合すること、西迫横穴墓群では11号横穴墓で13号横穴墓出土の須恵器甕破片が遺構間接合することが報告されている。遺物本体の詳細までは報告されていないが、これらは須恵器の破碎散布の事例と考えられる。このほか、遺構間接合の可能性がある例として、会津若松市駒板新田横穴墓群(福島県教育委員会1989)と東松島市矢本横穴墓群(矢本町教育委員会2008)の事例がある。駒板新田遺跡では、13号横穴墓墓前域出土の須恵器甕破片1点(非図化)が14号横穴墓閉塞石付近出土の破片1点(非図化)と類似、17号横穴墓破片2点(出土位置は玄室または墓前域)が13・15号横穴墓出土の甕と同一個体の可能性有との報告がなされている。遺構間接合の事実関係は確認できないが、須恵器甕の破碎散布の事例の可能性が高い。矢本33号横穴墓では玄室～玄門付近の天井崩落土上面で須恵器甕の破片5点(同一個体の破片)が出土しており、「追葬あるいは供養のために33号墓に来た人の残したもの可能性」が指摘されている。他の横穴墓出土の甕との接合関係は確認されていないもの

- の、33号横穴墓ではこの破片以外の甕が出土していないことからみて、他所で破碎された須恵器の破片が散布された可能性がある。
- 4) 2022年現在、合戦原遺跡が所在する亘理郡内で確認されている須恵器窯は8世紀中葉頃の新中永塙遺跡(宮城県教育委員会2016)、8世紀末頃の北名生東窯跡(山元町誌編纂委員会1971)、合戦原1号窯跡(山元町教育委員会1991)などがあるが、7世紀代まで遡る須恵器窯は発見されていない。亘理郡北部に位置する亘理町域の横穴墓出土須恵器検討を行った川口亮氏は、横穴墓で出土する湖西系在地産の長頸瓶・広口長頸瓶などの存在から、8世紀前葉頃の亘理郡では、湖西窯からの技術導入のもと須恵器生産が開始されたと想定している(川口2013)。合戦原遺跡の周辺は、「合戦原窯跡群」と呼ばれる古代の須恵器窯・製鉄関連遺構が多く分布している地域である。近年、合戦原遺跡横穴墓地区の周辺や、本遺跡南東500mの地点に位置する戸花山遺跡の調査で7世紀末頃の可能性のある木炭窯跡が発見されている(山元町教育委員会2022a・2022b)。こうした窯業関連遺構の検出事例と、本横穴墓群で多く出土する大甕の存在を踏まえれば、横穴墓に須恵器を供給していた窯が近隣に存在する可能性は高いと考えられる。
- 5) 福岡県牛頸窯跡群の総括報告書では、生産された須恵器甕の供給先(古墳・集落等)での出土・使用状況の分析から、大甕は通常の貯蔵目的よりも祭祀儀礼に使用するために製作された場合が多かった可能性が指摘されている(大野城市教育委員会2008)。山元町域の集落遺跡での調査例をみてみると、そもそも7世紀末~8世紀代の須恵器が出土すること自体少なく、集落と横穴墓で消費された須恵器の比率の違いは明白と言える。こうした状況から、少なくとも7世紀~8世紀中葉の段階の当地域においては、横穴墓等での祭祀目的で須恵器が生産・供給されていた可能性が高い。
- 6) 山元町犬塚遺跡で7世紀末頃の製鉄関連遺構が発見されている(宮城県教育委員会2016・山元町教育委員会2015)。当地域における製鉄技術の導入は、古代律令国家の対蝦夷対策に関連するものであり、合戦原遺跡で実施された破碎散布を伴う須恵器の祭祀儀礼についても、こうした鉄・須恵器生産技術の移入との関連性を視野に入れる必要がある。

第5章第1節2 引用・参考文献

- 飯村均2005『律令国家の対蝦夷対策・相馬の製鉄遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」021 新泉社
- 池上悟2015「横穴墓の大甕祭祀」『横穴墓論攷』六一書房
- 出雲市市民文化部文化財課2016『上塩治横穴墓群 第40支群』出雲市の文化財報告第32号
- 大分県教育委員会1989『上ノ原横穴墓群I 一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-』
- 大分県教育委員会1991『上ノ原横穴墓群II 一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-』
- 大野城市教育委員会2008『牛頸窯跡群 総括報告書I』大野城市文化財調査報告書第77集
- 亀田博1977「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻4号
- 川口亮2013「須恵器からみた横穴墓と官衙-多賀城以前の仙台平野南部について-」『歴史』第121輯
- 小林行雄1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊
- 篠原祐一2006「須恵器大甕祭祀」『季刊考古学第96号 特集 古墳時代の祭り』雄山閣
- 白石太一郎1975「ことどわたし考-横穴式石室の儀礼をめぐって-」『樞原考古学研究所論集』創立35周年記念
- 島根県教育委員会1997『島田池遺跡・鶴貫遺跡』
- 東松島市教育委員会2008『矢本横穴墓群I』東松島市文化財調査報告書第5集
- 東松島市教育委員会2010『矢本横穴墓群II』東松島市文化財調査報告書第7集
- 福岡県教育委員会1977「王城山C古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX』
- 福岡市教育委員会1987『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集
- 福島県教育委員会1989「駒板新田横穴墓群」『東北横断自動車道遺跡調査報告6』福島県文化財調査報告書第220集
- 南相馬市教育委員会2019『西迫横穴墓群(3次調査)』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 宮城県教育委員会2016『熊の作遺跡ほか-常磐線復旧関連遺跡調査報告書-』宮城県文化財調査報告書第243集
- 山元町教育委員会1991『合戦原遺跡』宮城県文化財調査報告書第140号抜刷 山元町文化財調査報告書第1号(第1集)

山元町教育委員会2015「山元町 犬塚遺跡 発掘調査概要」『平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』宮城県考古学会

山元町教育委員会2022a『戸花山遺跡-東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告III-』山元町文化財調査報告書第20集

山元町教育委員会2022b『合戦原遺跡 製鉄遺構・行政対応編-東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告IV-』山元町文化財調査報告書第21集

山元町誌編纂委員会1971『山元町誌』

米子市教育委員会1984『陰田 一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

亘理町教育委員会1981『桜小路横穴墓群』亘理町文化財調査報告書第2集

(山田隆博)

3 その他の土器類

合戦原遺跡の横穴墓地区（A 区）では、前述の土師器・須恵器類のほかに、弥生土器がわずかに出土している。その総点数は 52 点（総重量 410g）で、遺構別の出土点数の内訳は ST8:2 点（総重量 30g）、ST9:2 点（総重量 35g）、ST10:2 点（総重量 10g）、ST18:2 点（総重量 5g）、ST30:12 点（総重量 190g）、ST31:7 点（総重量 20g）、ST32:10 点（総重量 45g）、ST35:4 点（総重量 25g）、ST38:1 点（重量 5g）、SX1:10 点（総重量 45g）である。いずれも各遺構の堆積土中から出土しており、遺構に伴うと判断されたものはない。周辺の旧表土等から流れ込んだものと考えられる。

出土した弥生土器は全て壺または甕とみられる小破片であり、図示できたものはない。摩滅のため内外面の文様が明瞭なものは少ないが、細かい原体による地文があるもの、平行沈線があるものなどがある。いずれも薄手のつくりである。平行沈線の存在から概ね弥生時代中期後半の十三塚式頃のものとみておく。

同時期の弥生土器は、周辺の発掘区（B・C・D 区）でも出土しており、合戦原遺跡が所在する丘陵一帯には弥生時時代の遺構が存在した可能性が高い。

(山田隆博)

弥生土器出土遺構	点数
ST8（墓前域検出面/墓前域細別 11 層）	2 点
ST9（墓前域検出面/墓前域細別 2 層）	2 点
ST10（墓前域細別 7 層）	2 点
ST18（墓前域細別 2 層）	2 点
ST30（墓前域細別 5・8・9・11 層）	12 点
ST31（墓前域細別 2・5 層）	7 点
ST32（玄室堆積土/玄室細別 6・7 層/墓前域細別 14・15 層）	10 点
ST35（墓前域検出面）	4 点
ST38（墓前域細別 9 層）	1 点
SX1（堆積土）	10 点
計	52 点